世界初デジタル最新技術で原寸大に再現

至宝『日本の絵巻物』完全復刻シリーズ

監修　秋山光和

国宝

鳥獣人物戯画

第五回配本　全二巻セット

甲・乙巻　高山寺蔵

刊行のことば

村田誠四郎　丸善株式会社　代表取締役社長

絵巻物は日本が生んだ特有の美術様式で、詞書と絵によって展開するその独特の世界は、美術史的にも文学史的にも宗教史的にも風俗・生活史的にも貴重な存在です。

絵巻物はまた、絵と文章による複合芸術であり、時間性とストーリー性をもった絵画です。それは、今日隆盛をみているマンガ、アニメーションの源流ともいうべきもので、絵巻物はきわめて現代的な興味の対象でもあります。とりわけ「異時同図法」「吹抜屋台」といった表現方法は、マンガやアニメーションの表現法の先駆をなし、コンピューターグラフィックスの映像表現にも影響を与え、世界的にも注目を集めているところです。

絵巻物は、美術館、神社仏閣、大学、個人等において貴重な美術品として厳重に保管されており、特別陳列を除けばほとんど公開・展示されることがありません。特別陳列も海外において開催されることが多く、国内ではその機会に乏しいため、さまざまな観点から鑑賞されるべき絵巻物にふれることは事実上ないに等しいのです。学術用として、鑑賞用として、より身近に、手にとれる原寸大の複製品あるいは復刻品が大いに求められるところです。

戦前から一部の名作絵巻物の複製・復刻はなされていますが、モノクロ図版や縮小版が多く、学問研究や美術鑑賞に耐えるものではありませんでした。また、多くの場合、冊子本のかたちで紹介されており、左手で開き、右手で巻きながらストーリー展開を追い、かつ鑑賞するという、絵巻物本来の醍醐味が失われておりました。

このたび、最新のデジタル技術を駆使して豊かな絵巻物の世界を再現する、日本の絵巻物・原寸大復刻シリーズを刊行する運びとなりました。筆遣いの息吹さえも感じさせる高いクオリティの復刻と、巻物を開き広げ巻き込みながら鑑賞できる巻子本により、絵巻物の神髄を伝えることができるものと確信しております。

二十一世紀を迎えた今日こそ、日本独自の文化遺産である絵巻物を完全に復刻する好機と考え、新しい文化事業として、当社の全力を挙げて刊行してまいります。

六大特色

代表的絵巻物を網羅

美術ならびに歴史の分野において専門書や研究書、あるいは大学・短大の教科書・教材において掲載度の高い国宝クラスの絵巻物を選んで復刻。

高品質な印刷

最新のデジタル印刷技術と日本の伝統的な職人芸の融合により、内容豊かな絵巻物の世界を忠実に再現。

優れた印刷効果と耐光性

バガス紙（中性紙）と耐光性の強いトナーを使用することにより、従来にないインクのテクスチュアと抜群の色彩効果を実現。半恒久的な保存が可能。

「貼りつなぎ」なし

世界初の絵巻物用画像つなぎソフト（トッパン・フォームズと三洋電機との共同開発）により、何メートルにもわたる絵巻物を一枚の用紙に同時印刷することが可能に。実物にもない視覚効果と機能性を実現。

実物と同じ巻子本

原物を忠実に再現しているので、左手で巻き広げ、右手で巻き込みながら鑑賞する絵巻物本来の楽しみ方を実現。

詳細な解説書付き

それぞれの美術館の学芸員、専門の美術史家による解説。歴史資料文献としての価値も多大。

監修者のことば

秋山光和

日本の美術にとって、絵物語・物語絵などと呼ばれたいわゆる絵巻物が、大きな役割を果し続けたことはいうまでもあるまい。

「画巻」と呼ばれたこの形式が、他の諸文化と同様中国からもたらされたことは勿論であるが、すでに平安時代初期、九世紀末にはまず中国の物語を和文化した「長恨歌の絵巻」などが作られている。また日本での各種の説話や伝承を絵画化し、詞に絵を続けて絵巻の形としたものが作られたことは、二人の男に求婚された末、生田川に身を投げて自ら命を断ったという生田川処女（菟原処女）の哀話を絵画化し、さらに見る者がこれに歌を添えた由を記述した「かかる事どもの昔ありけるを、絵にみなかきて、故后の宮（宇多天皇中宮、八七二―九〇七）に奉りたりければ」とある『大和物語』の一説からもうかがわれる。

この九世紀末から十世紀にかけての物語絵の内容を大別すれば、『竹取物語』のような民間伝承を母体としたものと、『落窪物語』『うつぼ物語』など創作的な主題によるものとに分けて考えることも出来よう。そしてかの『源氏物語』「絵合」の巻には源氏方の『竹取物語』絵巻に対し、弘徽殿方からは新造した『うつぼ物語（俊蔭の巻）』が提出され、それは飛鳥部常則が絵を描き、能書家として知られる小野道風が詞を書いたことまで記されている。

そのほか『土佐日記』の絵、『住吉物語』の絵なども十世紀の文献にはさまざまに見ることが出来る。なお現在では詞しか伝わらないが、永観二年（九八四）にすぐれた文人源為憲が冷泉天皇の皇女尊子内親王の為に仏教に関係ある説話を集めた「三宝絵」も当初はかなり複雑な物語を絵画化した絵巻であったと推定しうる。

一方、私達が床（当時は置畳）の上で絵巻を拡げて鑑賞する際、左右の手の間隔は八〇センチ前後が適当と思われる。

この点をよく示している絵巻の例は、十三世紀初めに高山寺で作られた「華厳宗祖師絵」六巻であろう。新羅の僧元曉と義湘が龍の助けによって荒海を渡り中国に渡る物語であるが、場面の変化はほぼこの長さに対応している。

また現存の絵巻では最古と思われる『源氏物語絵』にしても、すでにこの物語が紫式部と呼ばれる宮廷女房によって創作された十一世紀初頭には彰子中宮の為に絵巻化されていたかとさえ推定されている。

現存のこの絵は保存のため詞と絵の境目に当る紙を巧みに分離し、桐箱に納めて徳川美術館と五島美術館とに保存されている。しかしその総量はほぼ当初の四分の一と考えられ、その他に詞のみの断簡十種ほどと、江戸初期に一部補修しつつ切断された「若紫」の図を挙げることが出来る。

何れにせよ、最初に刊行される『平治物語絵』をはじめ、『源氏物語絵』以下『信貴山縁起絵』『伴大納言絵』など重要な絵巻類が原寸原色の巻子形式で復刻発行されるという企画は、私にとっても何よりの欣びであり、美術の研究者並びに愛好家への貢献といわねばなるまい。

秋山光和（あきやま てるかず）

大正７年（1918年）京都市に生まれ、間もなく父祖の故地東京に移る。
昭和16年東京帝国大学文学部卒業、文学博士、東京国立文化財研究所を経て東京大学文学部教授。
昭和54年学習院大学教授。専門は日本の古代中世美術史であるが、中央アジア、敦煌絵画をも研究。

東京大学名誉教授
日仏会館副理事長
フランス学士院客員会員
ブリティッシュ・アカデミー客員会員

主な著書に
『平安時代世俗画の研究』（1964年 吉川弘文館）、『王朝絵画の誕生』（1968年 中央公論社）、『絵巻物』（1975年 小学館）『日本絵巻物の研究（上下）』（2000年 中央公論美術出版）、“La Peinture Japonaise”（1961年 スイス・スキラ書店、英・独語版も同時刊行）など。

世界に冠たる平安時代のブラッシュワーク

漫画、劇画、アニメーション、これらは現代芸術のさまざまな領域において無視できない地位を占めており、美術や映像の世界で、とりわけ次世代のアーティストを牽引する強力なパワーであり、世界的な流行ともなっています。静止画と動画の壁、映画、テレビ、印刷というメディアの区別を超えて、漫画、劇画、アニメーションのモチーフや動的技法、その躍動感の表現は縦横に活動の場をひろめています。

こうした現象はデジタル情報技術の発展と無縁ではありえません。革新的な技術が新しい造形表現を生み、表現されるものは新しい趣向を触発します。それを可能にしたのがデジタル技術です。これにより現代のアーティストは自由で大胆な発想のもとに、次々に表現内容を豊かなものにし、前衛的な作品を生み出しています。

しかし、わが国においては、すでに平安時代に優れた観察眼と筆一本のブラッシュワークで類いまれな動的表現をしたアーティストが実在しており、先駆的な仕事を残しています。その動かぬ歴史的証拠が、高山寺蔵の国宝『鳥獣人物戯画』であり、現代人の創造力をはぐくむアイデアの源泉になっていることを銘記すべきです。

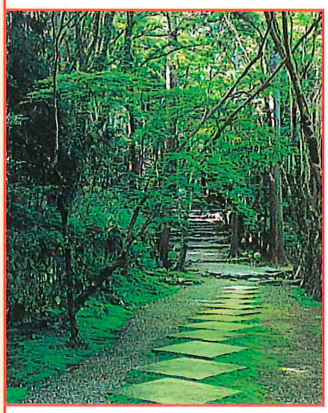
戯画とは、ふざけることを意味する「シャレ」、「ザレ」が変化したもので、それに「戯絵」という漢字をあてはめたもので、「シャレ絵三巻」という古い記載が確認されています。また十一世紀に編纂された説話集『今昔物語集』には「鳴呼絵（おこえ）」ということばが用いられており、「風刺的、またはふざけて描いた絵」を指しています。江戸時代以降は「ざれ絵」、「戯画」などとも呼ばれるようになりましたが、これは現在の「漫画」もしくは国際共通語ともなっている「MANGA」のことです。

『鳥獣人物戯画』とは、平安時代、それも十世紀にはすでに発生していた戯画の到達点ともいえる作品です。それを支えているのが対象を客観視できる冷徹な視点、卓越したブラッシュワークの妙によるデッサン力であり、描写力といえます。

鳥獣人物戯画と絵師について

高山寺

奈良時代に創設された古い寺です。鎌倉時代の十三世紀初頭（1206年）に後鳥羽上皇の勅願により明恵上人が華厳宗の根本道場として再建し、高山寺と改称しました。その後、応仁の乱等の戦乱で金堂や伽藍は焼失し、永いあいだ荒廃していましたが、江戸時代の寛永年間（1634年）に徳川将軍家の援助により再興され、真言宗単立の寺院として現在に継承されています。明恵上人の住居でもあった石水院は十三世紀当時の唯一の遺構で、国宝に指定されており、『鳥獣人物戯画』をはじめ『華厳宗祖師絵伝』、『明恵上人像』、『仏眼仏母像』等の国宝をふくむ多数の文化財の所蔵でも有名です。また、栄西が中国から持ち帰った茶がここで栽培されたことから日本の茶の発祥地、新緑紅葉の名所としても知られています。所在地　京都市右京区梅ヶ畑栂尾町八



国宝『鳥獣人物戯画』は京都栂尾（とがのお）の高山寺に秘蔵されてきたものであり、現存する四巻は、一般には第一巻から第四巻までを甲・乙・丙・丁と呼び称されています。現在、甲・丙巻は東京国立博物館、乙・丁巻は京都国立博物館にそれぞれ保管されています。

甲・乙・丙・丁のいずれの巻にも、絵巻の重要な構成要素である詞書がなく、画面のみからなる絵巻です。今回復刻します甲巻は鳥獣遊戯図、乙巻は鳥獣写生図が描かれており、同じ画風の作品と見なされています。また、丙巻の前半は人物遊戯図、後半は鳥獣遊戯図からなり、丁巻は人物遊戯図が描かれていますが、これら二巻は明らかに筆使いが異なることから、甲・乙巻とは別の絵師により制作されたものとの評価が通説になっています。

甲巻も、もともとは二巻あった絵巻が十六世紀中頃の戦乱により高山寺が炎上したさいに損傷したため、後世の手によって一巻に仕立て直されたものと理解されています。これは絵巻が罹災した際の損傷箇所が現存の甲巻にも検証できること、また住吉家伝来の模本やホノルル美術館蔵長尾模本、そして個人所蔵の数点の断簡などから実証的に類推できるからです。

甲・乙巻の絵師は、鳥羽僧正覚猷（かくゆう）（一〇五三―一一四〇）と言われていますが、それを裏付ける確証はありません。ただ、『古今著聞集』に掲載されている説話に鳥羽僧正が登場すること、当時の鳴呼絵と画僧との関係などのさまざまな背景から、その可能性は否定できません。

覚猷は『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』の編者として知られる大納言・源隆国の第九子であり、鳥羽離宮の護持僧であったことから鳥羽僧正と呼ばれ、「近き世にならびなき絵書（えかき）なり」と称された類いまれな画才の持ち主であったことにより名を知られています。京都の有名寺院に扉絵や仏画を制作したことで著名な高僧が、時代の流行や要請に敏感であり、その所産でもある戯画に注目し、『鳥獣人物戯画』という一大傑作を生んだということであれば、彼が近世的意識をもった多能な芸術家であったことの証拠といえます。

甲巻について

天地三〇六ミリ　全長一一四九六ミリ

平安時代の京の都で大流行していた「猿楽」は、即興の物まね芸、滑稽きわまりない余興芸など、さまざまな種類の大衆芸能からなっており、蛙や猿などの動物の生態に関連由来する芸なども路上で自由に演じられてもいました。また、当時の貴族階級では、猿・鳥・兎・狐などが多数登場する動物説話が愛好されていたこともあり、これらの文芸的背景のもとに動物の擬人化という発想が生まれたと考察されます。

甲巻では兎・猿・蛙などが擬人化されて画面の主人公を演じています。まず冒頭の兎と猿の谷川での水遊び、すすき・桔梗・女郎花などの秋草の自然描写、兎と蛙の賭弓（のりゆみ）、弓場の兎、兎と蛙の射手たちの控え場、賭弓の還饗（かえりあるじ）のために酒肴をはこぶ兎と蛙、そして競技に遅れ、慌てて弓をかついで駆けつける兎。ここで画面と筆法は一変し、このあと禄のものを受ける猿の僧正、馬に見たてた鹿を引く兎、手綱をかけられた猪を引く蛙、草履を手にする狐、傘をもつ兎、猿と蛙の喧嘩、田楽を踊る二匹の蛙とそれを見物する動物たち、有名な兎と蛙の相撲、双六盤をはこぶ猿、周忌法会の導師をつとめる猿の僧正、蓮台に安座する蛙の仏、目玉を見開く梟、籠に盛った瓜をかかえる兎、舶来品の虎の皮を捧げる兎と展開し、以上で二十三紙におよぶ甲巻は終わります。場面場面で異なる動物たちの表情や動作は自由で軽妙な筆さばきによって生き生きと表され、実際の人間が演じる以上の人間臭さを感じさせます。

岩山や岩石などの描写には密教図像にも通じる皴法（しゅんぽう）を使いこなしており、この絵師の並々ならぬ技量を感じさせます。

乙巻について

天地三〇七ミリ　全長二、一五九ミリ

乙巻は、『鳥獣人物戯画』の他の三巻と趣を異にしており、戯画的要素はまったくありません。『鳥獣人物戯画』の一巻として高山寺に伝来されたものではありますが、内容的にはさまざまな動物の生態を周辺の自然を背景にリアリスティックな筆さばきで描いている絵巻といえます。それゆえに、別な絵師による動物の絵手本としてつくられたのではないか、という見解もあります。

最初の絵は、五紙分にわたって駿馬の生態が丹念に描かれています。次にまた五紙にわたって牛が登場します。後ろ向き、横向き、前向き、子牛に乳を飲ます牛、突進寸前の牛、激突する二頭の牛などですが、とくに角突き合わせる二頭の牛は、これとまったく同じ図様が十二世紀後半に常磐源二郎光長（ときわのげんじろうみつなが）らの筆とされる『年中行事絵巻』の中に見られることから、乙巻が絵手本として作成されたこと、さらには光長自身がこの絵巻の作者ではないかという仮設までも出ています。

後半は、非凡な皴法の技法による岩山、そこに生息する鷹の描写が三紙分にわたり、懸崖から伸びた木にとまる鋭い目の二羽の鷹は猛禽そのものです。犬、鶏と画面は移りますが、雄鶏、雌鶏、三羽の雛を交えた鶏一家のなごやかな様態が描かれ、次の画面で風を切って飛ぶ二羽の雄鶏が動的表現へと移行します。鷲と隼、亀の甲羅に似た背を持つ霊獣水犀（みずさい）（インドサイが変形したもの）、古代中国の想像上の獣である麒麟が天を駆け、豹、山羊、雌雄の虎、獅子、象、そして悪い夢を食べてくれるとして当時の貴族社会で珍重されたといわれる獏（ばく）（鼻は象、目は犀、尾は牛、足は虎、体は熊という空想の動物）が末尾を飾っています。

体裁・造本

仕様

・表紙――雲丸龍紋様桂川緞子
・見返し――本金砂子
・軸木――吉野杉
・軸先――なら材花梨色塗装
・巻緒――古代紫正絹組紐　鬱金包裂各巻一枚
・桐箱――二巻入り会津桐印籠仕上げ　タトウ入

解説　上野憲示

解説者略歴

上野憲示（うえの けんじ）

一九四八年、大阪市生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。栃木県立美術館学芸員、東京大学、清泉女子大学等の非常勤講師（美術史学・博物館学担当）を経て、一九九一年に宇都宮文星短期大学教授に就任。現在、文星芸術大学学長ならびに同美学美術史専攻教授。上野記念館長。栃木県文化財保護審議会委員。著書に『鳥獣人物戯画（日本絵巻大成六）』（中央公論社）、『渡辺崋山の写生帖』（グラフィック社）、『国宝鳥獣人物戯画（ビデオ版）』（サントリー美術財団）、『ハイビジョン鳥獣人物戯画』（ハイビジョン・ミュージアム推進協議会）など。教育者としてはもとより、美術史学会、美術評論家連盟、日本オリエント学会、ジャポニスム学会等の会員として美術史、美術評論の分野で活躍。

企画製作――トッパン・フォームズ株式会社
企画協力――ＭＢＭグループ
刊　行――丸善株式会社出版事業部
価　格――三六八、〇〇〇円（消費税別）
ISBN4-621-04976-3 C1371

お問い合わせ先
Ⓜ MARUZEN-YUSHODO
丸善雄松堂株式会社 学術情報ソリューション事業部 開発部 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町10-10
Tel: 03-3357-1449 Fax: 03-4335-9419 Email: archives@maruzen.co.jp http://myrp.maruzen.co.jp/